(3) 広汎性発達障害のある幼児への構造化された支援による行動変化の検討

川崎医療福祉大学大学院医療福祉学専攻修士課程　○角田　正博
川崎医療福祉大学医療福祉学科　諏訪　利明

【要　旨】

2012年のアメリカ疾病予防管理センターによる調査で，自閉症スペクトラムのある人は68人に1人という結果があり，地域の中で出会う可能性があるといえる．自閉症の人は，先行研究より，自発的に行動することが少ないことが報告されている. しかし，構造化された支援により自発的な行動が促されるとしているが, そのプロセスを検証した論文は少ない. 本研究では，療育施設での個別セッションでの構造化された支援により，自発的行動がどのように変化するかを明らかにすることを目的とする.

対象児は，保育園に在籍する5歳男児で，広汎性発達障害と診断されている．CARS，PEP-3 , 行動観察による事前評価を実施し，評価をもとに，構造化の1つであるスケジュールを導入し，セッションを8回実施した．分析方法としては, システマティックインストラクションを参考に，スケジュール使用場面を3場面に課題分析し，自発的行動を介入方法に応じて，自ら行動できている状況を5とし，5段階で評定した . 結果として，評価場面は，離席し戻れない等，適切でない行動が何度も見られ，評定2または１で , 行動観察場面は，自発的ではあるが次は何かと何度も聞く様子が見られ，評定4であった. 構造化を導入したセッション1回目から , 次の活動を訊ねる行動は消失し．5回目以降，活動変更は評定4または5であった．しかし，活動中止場面は初回のみ評定2となった.

考察として，介入前は何度も離席する適切でない行動や, 次の活動を何度も訊ねる行動が, スケジュールを活用する行動へと変化した．構造化された支援により，理解して行動できたことで，自発的行動の内容が変化したと考えられる．苦手である予定変更に対しても , 柔軟な行動が見られた．しかし，2回目以降の活動中止場面で混乱を示さなかった要因は，スケジュールのシステムを理解したことで，適切な行動へと変化しためであると考えられる.